

ナラティブ・アプローチとは何か 二つの留意点をめぐって

野口 裕二

東京学芸大学

1 はじめに

ナラティブ・アプローチについてはすでに別稿（野口 2002, 2005）でくわしく解説しており、その全体像を理解するにはそちらを参照していただくほうがわかりやすい。本稿では、ナラティブ・アプローチについて一通りの知識を得たうえであらためて留意すべき点、ないしは、これまで説明が不十分だったと思われる二つの点にしばって若干の補足をすることにしたい。ひとつは、「ナラティブとセオリーの関係」、もうひとつは、「ケアの物語性」である。

2 ナラティブとセオリー

ナラティブ・アプローチを理解し実践するうえでもっとも重要なことは、ナラティブとは一体どのようなものなのかを理解することである。その際に導きの糸となるのは、ナラティブの反対語がセオリーであるということである。

ナラティブは、いわゆる「〇〇物語」というものを思い浮かべればわかるように、具体的な出来事を時間軸上につないだものである。それに対して、セオリーは、「〇〇理論」と呼ばれるものに明らかのように、要素間の一般的な関係を示すものである。ナラティブが、個別性、偶然性、意外性を含んで成り立つのに対して、セオリーは、一般性、必然性、法則性を含むことで成り立っている。

ナラティブの最大の特徴は、複数の具体的な出来事が時間軸上に並んでいるという点にある。たとえば、次の二つの文章を比べてみよう。

(A) 「昨日、飲み過ぎて、今日は調子が悪い」

(B) 「飲み過ぎた日の翌日は、調子が悪い」

(A) は「飲みすぎたこと」と「調子が悪いこと」という二つの具体的な出来事を含んでおり、それが時間軸上に並べられているのでナラティブであるといえる。一方、(B) は、具体的な出来事ではなく、飲

と体調に関する一般的な関係を述べたものなので、ナラティブではなくセオリーと呼ぶことができる。もちろん、セオリーと言っても科学的に実証されたものではないが、それを言ったひとの主観的世界においては科学同様の妥当性をもつセオリーである。ちなみに、クラインマンはこれを「説明モデル」と呼んでいる（Kleinman, 1988）。

ナラティブは具体的な出来事を時間軸上につないでいくことで成り立つ。一方、セオリーは、具体的な出来事から一步離れたところからおこなわれる説明の形式である。ただし、(A) と (B) が続けて語られたとすれば、その全体はナラティブと呼べる。具体的な出来事の連鎖に説明が付け加えられたものとみなせるからである。

ここで私たちは重要な問題に気づく。ひとつは、私たちの日常の発話や会話は、ナラティブとセオリーという二つの異なる形式を組み合わせることによって成り立っているということである。具体的な出来事の展開を追っていくような語り方（ナラティブ・モード）と、それを、より一般的な関係として説明するような語り方（セオリー・モード）がある。私たちは普段それと意識することなしに、この二つのモードを使い分けている。

もうひとつ重要な点は、私たちが「研究」と呼んでいるものはまさしくこのような意味でのセオリーを指すものだという点である。そして、私たちの意識がセオリー・モードにあるとき、もし仮に、(A) のような語り方が患者さんから語られたとしたら、私たちはすかさず、その背後にたとえば (B) のようなセオリーがあることを期待しそれを発見しようとする。

(A) だけではとりとめがなく研究にならない、なんとか (B) のような因果関係を見つけたい、しかも、まだ発見されていない隠れた重要な関係を発見できれば研究としての価値が上がる、と考えるのである。

つまり、「研究」とは、ナラティブからセオリーを取り出すこと、あるいは、ナラティブをセオリーに変換することであるといえる。そうして取り出されてきた多くのセオリーを私たちは学びながら、さらによりよいセオリーの構築を目指して日夜研究している。あるいは、このように生まれしてきたセオリーに基づいて、日々の臨床実践をおこなっている。

<連絡先>

〒184-8501 東京都小金井市貴井北町 4-1-1
国立大学法人 東京学芸大学
教育学部 社会科学講座

しかし、このとき、無視されてしまう大切なものがある。それは、患者さんが「調子が悪い」と言った後でさらにどんなことを語ろうとしていたのか、ということである。ここから話は思わぬ方向に展開したのかもしれない。しかし、セオリー・モードで話しを聞いているひとには、セオリーと関係ない事柄は耳に入らず、たとえ耳に入ったとしても忘れ去られる。一方、語っている方も、ちゃんと聞いてもらえているという実感が持たなくてそれ以上話す気をなくしていく。こうして、ナラティブはそれ以上展開することなく閉じてしまう。

セオリーを発見しようとしたり、セオリーにあてはめようとする聞き方は、ナラティブの自由な展開を阻害する。そして、そのことが患者さんのケアを阻害する。ナラティブ・アプローチが目にするのはこの点である。私たちはさまざまなセオリーに基づいて目の前にいる患者さんを理解しようとする。もちろん、それらのセオリーのおかげで患者さんのことがよく理解でき、適切なケアができることもある。しかし、逆に、セオリーにとらわれているがゆえに、適切なケアができないこともある。とりわけ、有効なセオリーがほとんどない領域、根本的な治療が期待できない多くの慢性疾患の領域がこれにあてはまる。

ナラティブをセオリー発見のための単なるデータにしないこと、ナラティブに既存のセオリーをあてはめて理解しないこと、ナラティブをナラティブとして聴き、その自由な展開や思いがけない展開を大切にすること、そして、そうすることがケアの具体的なプロセスとなりうること、ナラティブ・アプローチはこれらのことを主張する。

3 ケアの物語性

以上の議論は、患者さんの具体的な語りについてどう向き合うべきかということだったが、ナラティブ・アプローチにはもうひとつ、これとは異なる重要な意味合いがある。それは、個々の語りではなく、語りの一連のプロセスや関わりのプロセス全体が、ナラティブな構造をもっているという側面である。「ナラティブの重層性」、あるいは、「患者の物語と援助者の物語」というかたちでこれまでも言及してきたこと(野口, 2002)と関係するが、もうすこし補足しておく必要がある。ナラティブという言葉には「語り」という意味と「物語」という二つの意味が含まれているが、これから述べることは「物語」という側面と深く関係する。

ナラティブ・アプローチは、私たちが現実を理解する際に、なんらかの物語を参照し、それに制約される点に着目する。たとえば、自分の人生を物語のように説明したり、他人の人生をなんらかの物語のかたちで理解したりする。人生ほど長いタイム・スパンでなく

とも、たとえば、ひとつの仕事の過程などもひとつの物語として理解される。わかりやすい例としては、NHKの人気番組「プロジェクトX」がある。困難な課題を与えられて一旦は絶望的になりながらも、なんとか危機を克服して目標を達成する。「プロジェクトX」はつねにこの物語の形式になっている。

そして、「プロジェクトX」ほど大きな仕事ではないにしろ、私たちは日々の仕事のプロセスを、このような物語性、あるいは、ドラマ性のなかでとらえている。たとえば、「ある困難な患者さんに出会い、一旦は絶望的になりながらもなんとか危機を乗り越えて、患者さんは快方へ向った」というのは私たちにしておなじみの物語といえるだろう。もちろん、危機が乗り越えられないこともある。あるいは、いつの間にか患者さんとの関係が切れてしまい、物語が途中で終わってしまうこともある。しかし、そういう場合も含めて、私たちはひとりの患者さんとの関わりを一個の物語あるいはドラマのように理解し体験している。私たちは「物語的時間」(narrative time)を生きているのである(Mattingly, 1998)。

もし、そうだとすれば、ケアとはケアの物語抜きには語れないということになる。また、ケアの質を上げるということは、どのようなケアの物語を想定し、それを実際にどのように演ずるのかということとも無関係には語れないということになる。ケース検討もケース報告も、実は、そうした物語性という面からあらためて考察してみる必要がある。ケアの物語がうまく作れないとき、あるいは、想定した物語のように現実が進まないとき、私たちは、それを「困難ケース」と呼んでいるのではないだろうか。だとすれば、その想定した物語自体を再検討して、ストーリーをすこし変えてみることも、あるいは、思い切って、まったく別のストーリーを想像してみることが重要な意味をもってくる。

もちろん、「言うは易く行うは難し」でまったく別のストーリーを思いつくことはけっして容易なことではない。それが出来ないからこそ苦労しているのだとも言える。しかし、その手がかりはある。それは、患者さん自身の語るナラティブである。患者さんのナラティブが展開するなかで患者さんのなかに新しい物語が生まれてくれば、それがきっかけとなっていままでうまくいかなかったケアの物語が自然に書き換えられていく可能性がある。

こうして、「ケアの物語性」という問題は、再び、「患者さんの語り」という前述の問題へと回帰する。「ケアの物語」は「患者さんの語り」によって支えられている。一方、「患者さんの語り」は「ケアの物語」に制約されている。「語り」が「物語」を生み、「物語」が「語り」を生む。両者はお互いに支えあい変容しあう関係にある。ナラティブという言葉に含まれる二つ

の側面、「語り」と「物語」はこのように重なり合っている。「ナラティヴ」という言葉はこの重なり合いを表現している。

4 おわりに

以上、「ナラティヴとセオリー」と「ケアの物語性」という二つにポイントに絞って論じてきた。ナラティヴ・アプローチはすでに紹介の段階を終わって実践と応用の段階に入っているが、以上の二点はその際にあらためて留意すべき点である。ナラティヴ・アプローチは、患者のナラティヴのもつ大きな可能性に注目すると同時に、ケアそのものがもっているナラティヴな構造、物語性にも注目する。この二つの視点は、わたしたちの実践をより豊かなものにするはずである。

一方、ナラティヴ・アプローチは、実践だけでなく研究のスタイルをも革新する。セオリーを発見するための研究やセオリーをあてはめるための研究ではなく、ナラティヴそれ自体の展開とケアのプロセスとの関係に着目するという方向である。セオリーという形式をとらずに臨床的に意味のある知見を描き出すこと、それがナラティヴ・アプローチのもつ新たな可能性といえる。臨床の現場には、いまだ語られていない貴重なナラティヴが数多く眠っている。それらを丹念に拾い集めることが重要な意味をもつ。ナラティヴ・アプローチという物語はまだ始まったばかりである。

文 献

- 1) Mattingly, C.(1998) *Healing Dramas and Clinical Plots*, Cambridge
- 2) Kleinman, A. Kleinman, A.(1988) *The Illness Narratives. Suffering, healing and the human condition.* Basic Books. (江口重幸他訳、『病いの語り』, 誠信書房, 1996)
- 3) 野口裕二 (2002) 「物語としてのケア ナラティヴ・アプローチの世界へ」, 医学書院
- 4) 野口裕二 (2005) 「ナラティヴの臨床社会学」, 勁草書房

受付：2006年1月10日

受理：2006年1月30日